

二〇二五年

入学試験問題

国語

- 一、試験開始までこの問題冊子の中を見てはいけません。
- 二、この問題の試験時間は六十分間です。解答はすべて解答题紙（マークシート）にマークしてください。
- 三、問題と解答は、声を出して読むではいけません。
- 四、印刷がはつきりしない場合のほかは、問題についての質問は受けません。
- 五、終了の合図で、すぐ筆記用具を置いて答えの記入をやめてください。
- 六、この問題冊子は回収するので、持ち帰らないでください。
- 七、試験中は、監督者の指示に従ってください。
- 八、不正行為があった場合は、解答をすべて無効とします。

（問題文には、出題の必要に応じて変更を加えた部分があります。）

1

次の文章を読んで、後の問い（解答番号 1 ～ 6）に答えよ。

徒競走でいつも負ける子供が、いじめられて不登校になったという一つの極端な（しかし、十分ありうる）例を考えてみる。その子供の身になってみれば、これは自分の存在をかけた友達との間の争いである。ではこの場合に、争いを避けて競うことはできるだろうか。

一つ目の観点は、勝敗の判定基準の多元化によって、勝敗を一つの基準で決めない方向性がある。たとえばスキージャンプ競技では飛距離だけでなく着地のフォームも評価の対象となる。⁽¹⁾競争の効果が及ぶ範囲の限定は、逆説的に聞こえるかもしれないが、競争の領域と内容を増やすことで可能になる。

二つ目の観点は、競争に負けた人の処遇である。そこには何らかの競争に敗れたメンバーを学校や会社といった集団としてどのように遇するか、そして敗者本人がそれをどう受け止めるか、という二つの課題がある。たいていの競争では勝者になる人より敗者になる人が多いことを考えれば、これらの問題に上手く対処できるかどうかは、個々の集団の持続可能性に決定的な影響を与えるはずである。

住民同士の依存関係が深い伝統社会では、「負けの処理」に関する工夫が多く見られる。上手く処理できなければ共同体が壊れてしまうからである。一九六〇年代にメキシコの農村を研究した人類学者のジョージ・フォスターは、共同体の中で生じがちな羨望や嫉妬の気持ちを和らげることで「不幸の処理」の機能を果たしている文化的装置を発見した。それは、「善いものは数が限られている」という世界観（Image of Limited Good）である。フォスターの調査した集落では「望ましい物事——土地、富、健康、友情、愛、名誉など——は限られた存在量しかなく、その供給は常に不足している」という世界観が共有されていたという。

⁽²⁾この世界観は、他者の成功を偶然や幸運、運命など、人知の及ばない力に帰するときの助けになる。自分の能力が劣っている可能性をともに認めなくて済むからである。失敗や不運は個人の能力不足によるものではないと納得することで、人々は

精神的に打ちのめされることなく、最低限の自尊心を維持できる。

また、望ましいものが限られているとすれば、自分の利得向上は

A

。だからこそ集団の構成

員は「善いもの」の獲得を自慢するようなことはせず無用な嫉妬をおおることを避けようとする。他より多くを所有する人々は、宝くじのような偶然のメカニズムで思いがけず恩恵をこうむることができたのだと他人に説明することで、無用な羨望を抑え込むのである。この世界観によつて争いに発展しうる嫉妬や羨望を抑止できているとすれば、それは伝統的な共同体に特有の閉じた依存関係でこそ機能する工夫であると考えてよい。

「負けの解釈」を工夫する伝統は日本にもあった。第二次世界大戦の直後に出版された日本文化論の名著であるルース・ベネディクトの『菊と刀』は、当時、「異常なほどに好戦的」と思われていた日本人が、同時に風流なものを好むといった性格を合わせもつ点に着目し、その「矛盾」の深層にある行動原理に迫ろうとした。彼女の分析の中で特に興味深いのが、日本人の「負けるが勝ち」という価値観を論じている箇所である。

ベネディクトは、日本の子供がおもちゃをめぐってきょうだい喧嘩けんかをしたときの母親の仲裁方法に注目する。母親は年長者である兄の方をこう諭す。「負けるが勝ちと言うでしょう。だから小さい子に負けてやりなさいな」。この場面に描かれているのは、目の前の負けた子供をその場しのぎで納得させ、「負けを受け入れる練習」をさせる様子だけではない。母親は「大きい子」の自尊心をくすぐりつつ、「遊び」を楽しむするには小さい子も大きい子も、それぞれ役割があるという、一段高いところに視点を誘導しているのである。負けの受け入れ方を工夫するのは、それが単に敗者の精神的な安定に役立つからではない。敗者が勝者にむやみに嫉妬することなく自分なりの道を歩めるよう励ますことになるからなのである。

日本社会は、あからさまな負け組をなるべく生まないような工夫を様々な集団の中で重ねてきた。たとえば中央省庁の最高ポストである「(事務)次官レース」に敗れた官僚たちを外郭団体などで遇する「天下り」は、外部から見ると官民の癒着の象徴である。しかし官の視点から見れば、入省年次が上がるにつれて激化する出世競争に敗れた者たちを少しずつ納得させながら、組織のピラミッドを維持していくために有効な制度であった。

格差に由来する対立を未然に抑え込む工夫も、私たちの生活世界には散りばめられている。たとえば「気前の良さ」をカッコいいと見なす風潮である。富を手にした者には気前よく振る舞う責務が生じるという社会的圧力は多くの地域で見られる。身近な例で言えば、会社の飲み会で上司が多く支払うような会計の慣習である。お寺の寄進にも似たような機能がある。お寺の本堂には、それぞれの檀家^{だんか}が寄進した金額が貼り出されていることが多い。この慣習には、顔を知った者同士の「気前の良さ」を競争させることで再分配の仕組みをつくり、共同体を持続させる役割がある。

争うことなく競うために「負けの処理」が重要になることは各地の事例の示すところである。本章では、メキシコの農村のように負けの解釈自体を変える方法や、勝者から敗者への部分的な再分配を行ったり、競争の負け組をしかるべく処遇したりする方法を紹介した。勝敗を個人の能力だけによるものと見ず、天の采配と解釈することで争いを目立たなくするのが、集団内での争いをエスカレートさせない一つの工夫なのであった。

競争は人間社会に多くの恩恵をもたらした。しかし、競争が「向き」を変えて争いに転化すると、競争の果実は台無しになる。大規模な争いともなれば、社会は疲弊して、地球環境は傷つく。今ほどの経済規模でなかった時代から、人類はこの危険性に気づき、様々な工夫を社会に内部化することで争いがエスカレートしないよう試みてきた。だが、依存関係が特定の集団内部に閉じていた時代の社会で見られた仕掛けは、その集団内部での心の均衡を保つのに役立つが、個人単位の競争心に立脚した近代資本主義の世界でも有効だろうか。グローバル化が進行した現在、競争の利点を受け入れつつも、その影響を節度ある範囲に収め、競争に転化してしまうなど、競争の副作用が重症化することを未然に防ぐような工夫とはどのようなものであろうか。

一つのポイントは、競争の基準や対象をいかに顕在化させるか、もしくは顕在化させずにおくのか、という情報の操作である。伝統社会の方法に学んで、競争をあおるような序列を見えにくくし、争いを激化させる嫉妬や猜疑心^{さいぎしん}を刺激しないよう意図的に曖昧さを残す工夫である。

あらゆる分野において、外から見たときの「分かりやすさ」を求めるのが現在の風潮である。だが棚上げされていた尖閣諸^{せんかく}

島嶺有問題が日本側の国有化宣言を発端に日中の対立を顕在化させたように、分かりやすさは争いを呼びこむことがある。明確な基準を頼りに分かった気になって忘れてしまうのではなく、まだよく分からないことを考え続けることこそ、争いの当事者らをつなぎとめる力になる。

B、曖昧さは時に優柔不断や判断を遅らせるというコストを伴う。問題は、分かりやすさの中で置き去りにされるものをどのくらい重視するかであろう。たとえば、収益をめぐる競争環境の中で、どうにかして費用を節約したい企業が、悪いと知りながら廃棄物を不法投棄することがある。その結果、気づかれないまま環境が劣化し、災害リスクが高まることもあるだろう。この種の問題の場合は、むしろ競争の基準を分かりやすく表に出すことで、利益勘定に反映できる範囲で争いへの歯止めをかけるべきであろう。他方で、領土問題など既に緊張の焦点が明らかなものについては、それ以上、事を大きくせず曖昧に処理することの利点がある。そう考えると、曖昧さは、競争をそれぞれの領域に収めて、争いへの転化を防ぐための工夫であったとみることができる。

C、こうした工夫は国や地域という「外壁」に囲まれて、依存関係が閉じているときに機能するものである。国境や競技のルールなどの明確な枠組みがなければ、勝ち負けの問題ではなくなってしまうからである。勝ち負けの判定が避けられない場合はある。**D**、そうした場面を上手く限定するところに、争わない社会への工夫の急所がある。

競争環境にさらされている諸個人は、どのような回路で社会に争いを展開していくのか。身の回りの集団のレベルで争いを収めることができなくなるのは単に個々人の意図や意思の結果ではない。個と集団を健全な形で再び結び直し、競争が争いへと転化しないようにするには、競争によって可能になると考えられてきた自立や効率といった価値観そのものを見直さなくてはならない。

(佐藤仁『争わない社会』より)

問1

傍線部①「競争の効果が及ぶ範囲の限定は、逆説的に聞こえるかもしれないが、競争の領域と内容を増やすことで可能になる」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は①。

① 競争の判定基準を複数設定すると、基準ごとに優劣をつけることになるが、むしろそれによって競争の影響が度を越したものになってしまうのが避けられるということ。

② 競争の範囲を限定すると、勝つ機会が限られるために競争が激化しかねないので、むしろ競争の種類や内容を増やして誰もが勝つ機会に恵まれるようにすればよいということ。

③ 競争の判定基準を複合的に組み合わせると、勝ちの基準が不明確になりそうだが、実際には基準が一つの場合よりも勝敗の理由付けに説得力が生まれ、社会的な理解も得やすくなるということ。

④ 勝敗を一つの基準だけで決めないことで、一時的には双方を納得させられるが、長期的に見るとかえって互いの競争心を強め、新たな領域に競争が無際限に広がっていく事態を招くということ。

問2

傍線部②「この世界観」とあるが、それによってもたらされる状態の説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は②。

① 善いものを獲得する機会は非常に少ないという発想をもつことによって、努力しても報われるとは限らないという考え方が生まれ、上手くいくかどうかは運次第だと物事を楽観的に捉えられるようになる。

② 善いものを得られるかどうかは必ずしも本人の能力によらないと考えることで、それを勝ち取れなかった者の自らに対する失望が和らぎ、また勝ち取れた者に対する余計な嫉妬心が人々に生じるのが抑制される。

③ 善いものの配分は伝統によって決まっているという意識をもつことで、共同体内に格差が存在するのは当然であるとの考え方が行き渡り、善いものを得た者にもそうでない者にも格差に対する諦めの念が芽生える。

④ 善いものは常に供給不足の状態にあるという考え方によって、自分から善いものを求めるのではなく、他者から授かるという発想が生まれ、相互扶助の意識により好戦的な気持ちをもたなくて済むようになる。

問3

空欄 A

に入る表現として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 3。

- ① 誰かの利得を譲り受けることでしか達成できない
- ② 誰かと利得を生み出すことでしか達成できない
- ③ 誰かと利得を分け合うことでしか達成できない
- ④ 誰かの利得を減じることではしか達成できない

問4

傍線部(3)「競争の副作用が重症化することを未然に防ぐような工夫とはどのようなものであろうか」とあるが、筆者が考える工夫として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 4。

- ① 当事者らの緊張関係をほぐすために論点を整理した上で、徹底した議論を通じて解決策を見いだす努力をする。
- ② 当事者らが競争の論点を考え続けて関係を維持できるように情報を操作し、不明瞭な部分を作為的に残しておく。
- ③ 当事者どうしの依存関係を絶つために明確なルールを提示し、互いに干渉し合わないようにする。
- ④ 当事者と当事者の属する集団の結束を促すために、あえて当事者間の勝ち負けを明確にする。

問5

空欄 B

く D

に入る語句の組合せとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 5。

- ① B さすがに C すなわち D ひいては
- ② B もっとも C いわば D しかも
- ③ B たしかに C もちろん D さらに
- ④ B なるほど C ただし D しかし

問6

本文の論の展開を説明したものとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 6。

① はじめに格差に由来する対立を未然に抑え込むことが集団の持続可能性に効果があることを論じ、続いて現代社会は国や地域などの枠組みが曖昧になった結果、伝統社会が維持してきた「負けの処理」の機能が弱まったことを示し、最後に競争を争いへと転化させないためには集団として有する伝統的価値観から脱すべきであると主張している。

② はじめに伝統社会では競争を争いへと転化させないために「負けの処理」が重要視されてきたことを具体例を挙げて説明し、続いて現代社会でも争いを防ぐ工夫として「曖昧さ」などの伝統社会の知見が有効であることを示し、最後に争わない社会を実現させるためには自立や効率といった価値観を問い直す必要があると論じている。

③ はじめに競争が争いへと転じることと日本文化の伝統に密接な関係があることを述べ、続いて個人主義に由来する能力主義が集団内の争いを助長させることを示し、最後に集団内の争いを制御してきた伝統社会の知見を活かしつつその国や地域に固有の文化的価値観を時代に合わせて更新する必要があると述べている。

④ はじめに競争が争いへと転じることがないように様々な工夫がなされてきたことを示し、続いて競争が争いへと転じてしまう要因が伝統社会と現代社会では異なることを対比的に説明し、最後に不毛な争いを防ぐためには自立や効率など近代資本主義が前提とする価値観を否定する必要があると主張している。

日本のかなりの数の政治家たちは、戦前も戦中も戦後も、家族が大事、家庭が安定すれば国も安定する、と言い続けている。孤食が生じるのは家族の絆が弱くなっているためだ、母親の愛情が足りないからだ、家族の絆を取り戻さなければならない、などという意見も相変わらず存在している。まさに家族絶対主義の宝庫だ。けれども、家族を本当に大切に思う人は、この類の言説に疑問を感じるにちがいない。なぜなら、こうした言説は、家族の愛を深めるための言葉ではなく、むしろ、家族から毎日湧いてくる力を利潤に転換するための言葉だからである。さらにいえば、労働力の定常的な品質管理と持続可能な確保は、市場にとって生命線であり、そこに企業の収支がかかっている場合は、収奪はさらにシビアになる。

「食は教育の課題なのか——食育基本法をめぐる考察」（佐藤卓己編『岩波講座現代 第八巻 学習する社会の明日』岩波書店、二〇一六年）で、私は、孤食の問題の責任を家族に押し付ける政治や経済の仕組みを、食育基本法はあまり打破しようとしていないと論じた。「国民運動」と自己規定する食育は、その背景にある労働や福祉の仕組みの歪み（ゆがみ）を無視して、家庭になんとかせよと要請する。たとえば、いくら家族で食卓を囲むように啓蒙活動（けいもうくわつ）をしても、企業の労働環境の改善にノータッチのままでは意味がない。家族とは、市場にとってみれば、労働力を復活させる修理所であり、未来の労働者を産出する生物機械である。市場にとっては貨幣で購入できない魔法のような装置であり、家族の成員にとっては現実であるこのはたらきがなければ、一日たりともみずからの運動を維持することができない。だから雇い主は、賃金を払って、労働力のリフレッシュを促す。けれども、賃金が健康な食を購入するのに十分ではない場合、賃金が高すぎる携帯電話の利用料によって毎月大幅に削られなければならない場合、賃金が子どもを育てるのに十分ではない場合、雇い主は、家族のモチベーション⁽¹⁾、家族のやる気、家族のがんばり、家族のふんばり、そして家族の「愛」に頼ることになる。だから、政府は人びとの心を動かすように「運動」を必要とするのである。

家族の愛を育むことを国家が説き始めるときは細心の注意が必要である。というのも、教育勅語に端的にあらわれているよ

うに、個より公を優先するような道徳観の押し付けの合図を意味するからである。それは国や家族を愛することの強制であるばかりではない。市場の外に存在する労働力再生産装置に、つまり、Aに過度に頼るための、内面の管理なのである。だが、そもそも、家族とは市場や国家が求めるようなものだったのだろうか。ともに住む行為は、こんなにも管理されやすいものだったのだろうか。

そのために⁽²⁾も「家」とは何か。根源的に考えてみよう。思い切って、洞窟だった頃の家に遡って定義してみたい。家とは、外の雨、雪、風、埃、熱などから内部を三次元的に囲ってできる空間のことである。家とは単に名詞として静態的にとらえてはならない。もっと動態的に、つまり、「囲う」という動詞から考えなくてはならない。これが家の基本である。では、何を囲っているのか。

第一に、空気を囲うこと。進化の過程で皮膚から毛が抜け落ちた人類は、毛に覆われた動物よりも、雨、風、寒さ、暑さ、砂埃によって体が痛めつけられやすい。疲労も早い。空気を囲うことで、温度と湿度を保ち、風と雨や雪を避け、直射日光を遮り、皮膚の露わになった人類の体を消耗から守らなければならない。

第二に、寝る場所を囲うこと。人間は、ほかの動物よりも深く寝る傾向にある。寝ているあいだ、人間はなにもものに襲われる可能性がある。敵から身を隠さなければならないことは、もはや意識されない人間の基本的なあり方である。

第三に、生殖を囲うこと。恥じらいをもっとも強く感じるこの行為は、人目を避けなければならない。性の場所を囲うためには、単純に壁が必要である。

第四に、火を囲うこと。風や雨から火を守り、火をたやさないこと。こうして寒い夜や冬には暖をとり、湿気を取り、台所ではナマモノを焼いたり、炙ったり、水を沸かしたりするために、火を囲わなければならない。

ただし、人間は、食は公開する。火のまわりに人が集まる。原始時代から、おひとりさまのシステムファイヤーキッチンが存在していたのかもしれないが、それはレアケースだろう。そこには家族以外の人間が集まりやすいような吸引力が生まれる。火を使い生きものの死骸を変質させて、吸収しやすくしたうえで食べる動物が人間だけであることは、もしかすると、食の公

開と関係しているのかもしれない。煙や煤が室内に充満するのを防ぐために、しばしば食は野外でなされた。もちろん、換気の装置は室内の料理を可能にした。しかし、人類が比較的高性能の換気装置を手に入れたのはつい最近であり、しかも、いまなお地域的に限定されている。欧米でさえ、農村では、天火の使用は近代までなされているところも多かった。煙と煤が長いあいだ、地球上の台所の象徴であり、電気とガスがそれから人間を解放しつつあるとはいえ、他方で薪ストーブが人気なのは、火から離れた人間の寂しさのあらわれかもしれない。

そこで思い出すのが、ドイツ各地で訪問した野外博物館である。ここでは近世の農村の風景や建てものが民俗学の研究に基づき、復元されている。ここで驚いたのは、どこでもパン焼き小屋があったことだ。村落のなかにあり、そこを共用していた。パンは定期的に大きな窯で焼かれ、村民で分けていたのである。

煙と煤が充満しないように火を扱う場所は広くなり、また、広く暖かいので人が集まる。台所とは、考古学的に言えば、そんな場所であった。

とすると、食の行為が家という囲いのなかでなされるためには、引きこまれるだけのキッチンとダイニングの装備の充実が必要である。

ゲオルク・ジンメル（一八五八―一九一八）というドイツの社会学者は、一九一〇年に執筆された「食事の社会学」という論文のなかで、原始時代にはひとつの鉢に複数人の食べものが入っていて、それを各人がつかみ取りをしていたが、歴史が進むにつれて鉢に対立するものが生まれた、と述べている。それこそが、皿である。⁽³⁾皿という食器は、個人主義の象徴である、というような言い方だ。ちなみに、日本も近世社会では配膳式が主流であり、それぞれ別々に食べものが盛られる。

この図式が実際にどれだけの文化の歴史的な変遷に符合するのか、西洋以外の文化にも当てはまるのかどうかはとりあえず置いておき、自分の皿が各自のテーブルの前に置かれるのが、近代のひとつの特徴であるというジンメルの指摘は興味深い。皿は、本来は三次元的に囲われつつも開かれた行為であった食を、三次元的に閉ざされた空間にしていくひとつの道具となった。

もちろん、大きな皿や鍋を食卓に置いて、家族でつきあうことも少なくない。ただ、これは原始的な食のかたちの名残というよりは、近代の発明であった。⁽⁴⁾

ライデン大学のカタジーナ・チフェルト力による詳細な日本の食の研究によると、近代社会が産み出したサラリーマン階層の核家族は、近代家族のモデルとなったが、その重要な役割を果たしたのがちゃぶ台であった。家庭的な温かい雰囲気の中で、外で働く父親がリフレッシュできること、そのなかで家族愛が育まれること、そうした家族の機能は資本主義社会にとつて必須の労働力再生産装置であった。つまり、お膳を用い、家族がバラバラで食べ、家族以外の成員も入ってくる、という前近代的な形態から、狭い家でも脚をたたんで収納できるちゃぶ台を使い、核家族が全員集合し、サイドメニューを盛った皿を真ん中に置き、^(注)各々がご飯と味噌汁でそれを食べるという形態に変化したのである。ちゃぶ台は、もともと中国料理と日本料理の折衷である卓袱料理の台から発展したものだ、とチフェルト力は述べている。近代社会は、共食を、家族というパーティーションで囲んだのであった。食育基本法が家族の枠組みから「食育」を解放できないのは、こうした歴史的経緯があるからだ
と私は考えている。

現在、家族の構成も多様になりつつあるなかで、家族という、ひとつの人間グループに対し、いつの時代にもまして厳しく吸い取られている労働力の回復の役割だけでなく、育児・介護の担い手、税金の納入者、学校教育の補助という課題がつぎつぎに降りかかり、もはや近代家族モデルでは成り立たないほどにまでなっている。そんななか、⁽⁵⁾ちゃぶ台の拡大、家族以外の人間が座ることのできるちゃぶ台の開発が、かつてなく求められている。

(藤原辰史『縁食論』より)

(注) 卓袱料理Ⅱ長崎に伝わる独特の料理。種々の器に料理を盛って、ちゃぶ台の上におき、各人が取り分けて食べるもので、料理は主に江戸風で、食べ方が中国風のもの。

問1 傍線部(1)「政府は人びとの心を動かすように『運動』を必要とする」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。 解答番号は[7]。

① 政府は、働き手を苦しい暮らしに追い込む社会構造を改革することによってではなく、家族を大切に思う人びとの気持ちに訴えることによって、良質な労働力の安定的確保をはかろうとしているから。

② 「孤食」問題の本質は、今や家族が愛の希薄化で十分に機能していない点にあるため、政府は、家族を本当に大切に思う人を増やすことによってこれ以上の家族の崩壊を防ごうと考えているから。

③ 企業が自社の労働環境整備の責任を家族に押し付け、積極的な改善努力を怠っているので、政府は市場の安定のために企業にその姿勢を改めさせる動きが必要であると判断したから。

④ 現在の市場は、家庭でリフレッシュした労働力を搾取することで安定しているが、そうした理不尽な仕組みを変えるためには、政府が人びとに自助努力を求めなければならないから。

問2 空欄 A に入る語句として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。 解答番号は[8]。

① 家族観を改革する教育

② 人間のうちにある自然の力

③ 国を安定させる政治の仕組み

④ 賃金支払いによる労働力の確保

問3 傍線部②『家』とは何か。根源的に考えてみよう」とあるが、その考察の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[9]。

- ① 家とは、人間の身体と生活を消耗や外敵、人目などから守ったり、生活のための火を守るために囲う働きをするものであるが、食の行為の場は人びとが集まるという意味で開かれた場所でもあった。
- ② 家の基本的な機能に立ち戻って原始時代から考えると、家が果たしてきた役割は本来の「囲う」から「公開する」へと次第に変化していったことがわかる。
- ③ 家本来の役割には、人間の生活の場を囲うことと、食を公開することの二つがあったが、火の使用に伴う煙や煤への対処が可能になってからは、囲うことのみにその役割が限定されるようになった。
- ④ 家本来の働きは人間とその生活を外部から囲うことにあり、それは、皮膚の弱さや眠りの深さ、生殖への恥じらい、火の周りに集まって食をとることといった、今は失われた人間の特性に起因している。

問4 傍線部③「皿という食器は、個人主義の象徴である」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[10]。

- ① 家族の成員が各々皿を用いることにより、好きなものを各人が遠慮せず取れるような個人中心の考えが発達していったということ。
- ② 皿は複数人の食べ物を一つに盛り付けることができるので、それにより各人が好きなように取って食べる食事の仕方が定着したということ。
- ③ 複数の人びとが集まる食卓に登場した皿は、各人の取り分を示すことにより囲いを再設定する道具として機能したということ。
- ④ 近代に入って皿が使われ始めたことで、テーブルでの個人の位置が固定され、自分自身の居場所を確定する役割を皿が果たしたということ。

問5 傍線部(4)「これは原始的な食のかたちの名残というよりは、近代の発明であった」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[11]。

① 家族で鍋や大皿をつつきあう行為は、それまで個々に食事をとっていた家族の成員が食卓を囲んで集まるようにし、それによって家族を一つの単位とした近代の産物であるということ。

② 家族で大皿を囲んで食事をとるという光景は、かつて原始時代に鉢を囲んで食事をしていた光景が、一時期の衰退を経て、近代に入って新たな着想を得て復活したものであるということ。

③ 食卓の場に家族だけが集まることは、昔とは異なつて家族愛が薄れた時代に、それを回復するために生み出された近代社会の工夫であるということ。

④ 家族の温かい雰囲気の中で食事をつつきあうことは、資本主義の発達以前には予想できなかった家族の新しい機能のあらわれであるということ。

問6 傍線部(5)「ちゃぶ台の拡大、家族以外の人間が座ることのできるちゃぶ台の開発が、かつてなく求められている」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[12]。

① 核家族化や少子化が進行したことによって家族の構成員が少なくなりつつあるなかで、より大きな家族を築くことが問題解決のために必要だということ。

② 様々な家族のあり方を認めつつある現代の状況を改めるために、原始的な家族のあり方の価値をもう一度見直す必要があるということ。

③ 育児や介護の負担、学校教育の補助など様々な責任を果たすことを家族が求められるなかで、家族に限らない人びとの共食によるリフレッシュが必要であるということ。

④ 核家族を前提として、食をはじめとする様々な負担や役割を家族に強いる現状は限界を迎えており、広く社会のなかで負担を分け合える仕組み作りが必要だということ。

問7

本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 日本では戦前から、労働力の品質管理が政治家の生命線だとされた。
- ② 食育基本法の発想は、近代家族を基本とした考え方の枠組みに留まっている。
- ③ 食育は道徳観にのみ関係することであり、政治や経済からは切り離すべきである。
- ④ 電気やガスが登場したことにより、人間は火を扱う場所を軽視し始めた。

近代社会の理想は、科学的知識が世の中へと広く浸透し、誤謬^{ごびやう}や偏見を取り除いていくというものだろう。けれども、現実には、一見すると科学に見えるが本当は科学と言えない「ニセ科学」が、世の中に溢^{あふ}れている。例えば、占星術・ホメオパシー・超心理学・血液型性格診断といったものは、その代表例とされる。科学者たちは、これらを「疑似科学」と呼んで批判してきた。では、科学と非科学の境界線は、一体どこにあるのだろうか？

多くの人は、両者の間には明確な境界線があるはずだと思うだろう。しかし、科学哲学の歴史は、むしろ、両者の間に境界線を引くことが一種の難問^{アポリア}だということを明らかにしてきた。一つ一つ順に見ていこう。

まず挙げられるのが、論理実証主義（ウィーン学団）の提唱した「検証可能性 verifiability」である。論理実証主義は、^{（注1）}科学と形而上学^{けいじじようがく}を区別することを目指した。そこで両者を分ける基準として持ち出されたのが「検証可能性」だった。主張

（Ⅱ文）の正しさを経験によって「検証 verify」する方法があれば科学であり、それが無いなら形而上学だと考えたのである。これに従うと、例えば、「Xは神である」とか「XはYの原理である」といった形而上学的言明は、どんな場合に真となるかが不明だから、科学ではないと言える。

一見すると、これはうまい基準のように思えるし、科学の通俗的イメージもこれに近い。だが、オーストリア出身の科学哲学者カール・ポパーは^{（注3）}この回答に満足しなかった。^{（1）}なぜなら、この基準では、ポパーが非科学だと考えるマルクス主義やフロイトの精神分析^{（注3）}が、科学と区別できなくなってしまうからだ。ポパーによれば、これらの理論には、それを「検証（Ⅱ立証）する事例が豊富にある。例えば、マルクス主義者であれば、新聞のどのページを開いても、社説や広告の中に階級闘争^{（注4）}を立証する根拠を発見できるだろう。そこでポパーは、これらの理論が科学とは言えない理由を「反証 falsify」できないことに求めた。つまり、それらはどんな事例もアドホック（後付け的）に説明でき、どうやっても偽にならない都合の良い議論だというのである。

こうした「反証可能性 falsifiability」の考え方はシンプルでわかりやすい。だから、自然科学者にせよ、社会科学者にせよ、科学の基準として「反証可能性」を持ち出す人は多い。とはいえ、科学哲学的に見ると、ポパーの議論が決定版というわけではない。それどころか、⁽²⁾「反証可能性」自体に反証例がある。

科学哲学者イムレ・ラカトシュによれば、科学者はポパーが考えているよりも「厚顔」である。すなわち、科学者たちは事実が理論と合致しないからといって、いつでも理論を捨て去るとは限らない。ある「リサーチ・プログラム」(＝理論の系列)には、決して反証されない「堅い核 hard core」と、それを守る「防衛帯 protective belt」とがある。だから、反証事例が出てきても、「堅い核」を構成する中心仮説は温存しつつ、「防衛帯」を構成する補助仮説の方だけを棄却することができる。実験によって中心的な理論仮説を否定する結果が出てきたとしても、「実験装置が正常に作動している」という補助的な仮説を否定し、「実験装置に異常が起きた」と考えれば、中心的な理論仮説を維持できる。同じように、ニュートン主義者に「あなたはこういう条件で実験を行えば、ニュートン理論を棄却しますか？」と尋ねても、そのような条件は出てこないだろう。なぜなら、ニュートン理論を棄却するような事例が出てきたとしても、補助仮説を追加したり、削除したりすることで対処できてしまうからである。

では、科学と非科学をどう分ければ良いのか？

ラカトシュの答えは「新事実の予測」である。すなわち、本質的に新しい事実を予測できる前進的プログラムと、それができない退行的プログラムを区別すれば良いというのだ。例えば、マルクス主義や精神分析は、手を替え品を替え、同じタイプの事実を予測するだけなので、前進的ではなく、退行的(＝非科学的)である。

この議論はポパーの議論を洗練させている。ところが、ラカトシュの議論にも、ウィーン出身の科学哲学者ポール・ファイヤアーベントによる批判がある。それは次のようなものだ。

ラカトシュは、前進的プログラムを選ぶ科学者の方が「合理的」だと主張する。たしかに、新しい予測を生み出せない退行的プログラムよりも、それを生み出す前進的プログラムを選ぶ方が良いのはもつともだ。しかし、現時点では新しい予測を生

み出さないプログラムでも、少し待っていると、立ち直って前進的なものにも変わるかもしれない。つまり、退行的プログラムを支持することもまた「合理的」でありうる。だとすれば、前進的プログラムと退行的プログラムのどちらを採用しても「合理的」だということになる。そう考えると、前者だけが「科学的」で、後者は「非科学的」だと決めつけることはできなくなってしまう。

このように本質主義的アプローチからは次々に新しい基準が現れたが、いずれも簡単にはうまくいかないことがわかってきた。

ラリー・ラウダンは、このことを「疑似問題 pseudo-problem」と表現している。ラウダンの見るところ、科学を科学たらしめる不変の条件はない。検証されている理論もあれば、そうでない理論もある。成長する分野もあれば、そうでない分野もある。驚くべき予測的中させる理論もあれば、そうでない理論もある。アドホックな仮説もあれば、そうでない仮説もある。このように科学には多様性があり、同じことは非科学にも当てはまる。だから、科学と非科学の境界を決めるなど、そもそもできない相談である。

もちろん、そうは言っても、科学と非科学の区別が全くもって不可能だと言い切るのは暴論だろう。例えば、科学哲学者の伊勢田哲治は、科学と非科学を分けるための複数の基準を設定した上で、多くの基準を満たすものを明確な科学とし、少ない基準しか満たさないものを非科学とする方針を提案している。このように、科学と非科学の間に

 を設ければ、「線を引きずに線引き問題を解決する」ことができる。

その意味で、「線引き問題」を「疑似問題」とまで言うのは、やはり行き過ぎに見える。ラウダンは、従来の解答が失敗していると指摘しただけで、伊勢田の言うような解決を排除しないからだ。だが、それでもやはり「疑似問題」という言葉には見るべきものがあると思われる。それは、次のように考えられるからだ。

そもそも「線引き問題」は、「これは科学である」とか「あれは非科学である」といった常識を前提している。その常識に厳密性や一貫性を持たせるために、科学哲学者は科学の必要十分条件を与えようとしてきた。けれども、ここには大きな問題

がある。科学と非科学の境界線を定めるためには、ある時点で人々が「科学」と呼ぶものの共通成分を取り出す必要があるが、何を「科学」と見なし、何を「非科学」と見なすかをめぐる常識自体が歴史的に変化する。だから、最初の時点で得られた科学の必要十分条件が、次の時点では通用しなくなってしまうのだ。したがって、「線引き問題」は、同時代の人々が何を「科学」と見なすかに決定的に依存しており、その解決は常に一時的なものしかありえない。

だとするならば、「線引き問題」という問題に答えるよりも、むしろ、人々が何を「科学」と呼び、何を「非科学」と呼んでいるのかの方が重要な問題に思えてくる。実際、アメリカの科学社会学者トマス・ギアリンは、⁽⁴⁾「境界画定作業 boundary-work」という概念を導入することで、そうした方向へと議論を進めている。

「境界画定作業」とは、科学と非科学の境界を構築するために、特定の性質を選択的に科学の側に帰属させることを指す。要するに、科学と非科学の間に境界線を引く作業のことだ。ギアリンによれば、科学と非科学の線引きは、哲学者の問題であるだけでなく、科学者自身の実践的な問題でもある。哲学者は「科学とは何か」という問いに解答を与えようとするが、科学者は科学と非科学の境界を実践の中で構築している。例えば、科学という制度が「拡大」を目指す局面では、ライバルとなる知的活動との差異を強調する。また、科学が職業的権威や資源の「独占」を目指す場合には、ライバルとなる知的活動に「疑似科学」や「アマチュア」といったラベルを貼って排除する。さらに、職業的活動が批判に晒され、「自律性の保護」が必要となる場合には、科学の外部に身代わりを探し求める。^{スケイプゴート}

重要なのは、科学の特徴とされるものが、それぞれの局面での要求に合わせて、ころころと変化することである。例えば、宗教と対比する際には「科学は事実に基づく」と主張し、技術と対比する際には「科学には理論がある」と主張するという具合に、科学に割り振られる側が持つ特徴群のうち、正当化に必要な特徴だけを選択的かつ場当たりの提示するのだ。

そう考えると、科学の「本質」(＝必要十分条件)を取り出そうとする「線引き問題」は、それ自体が「境界画定作業」の遂行でしかないように思われる。そこで、「境界画定作業」の分析を「線引き問題」の反本質主義的アプローチと呼ぶ。

本質主義的アプローチは、科学に不変の「本質」を探し求める議論を立てる。一方、反本質主義的アプローチは、科学に不変の「本質」があるという前提をとらず、むしろ、科学と非科学の線引きという作業を通じて、「本質」が事後的に「発見」されるだけだと考える。

一見すると、本質主義よりも反本質主義の方が洗練された議論のように思われるかもしれない。本質主義が常識的であるのに対し、反本質主義はその常識を裏切ろうとするからである。しかし、筆者の見るところ、両者はともに問題を抱えており、長所と短所とが相半ばしている。

すでに見てきたように、本質主義的アプローチは、科学の現実を捉えているとはいいがたい。「科学」と呼ばれるものの代表例は物理学・化学・生物学だが、それらの間にも差異がある。もっぱら数式を利用した理論構築に励む科学者もいれば、実験を行う科学者もいるし、研究室を出てフィールド調査に出かける科学者もいる。また、実験室での雑談、会議室での非公式の会話、学会発表での質疑応答、論文をめぐる査読者とのやりとり、論文そのもの、といった場面ごとの違いも大きい。科学がそうした多様性を含んだ営みであることを、まずは確認しておく必要がある。

だが、それ以上に重要なのは、歴史的多様性の方だ。ある時代に「科学」と見なされてきたものが、次の時代には「非科学」と見なされることも珍しくない。しかも、知識が移り変わるだけでなく、理論や方法もまた変化していく。だとするならば、歴史超越的な一つの「科学」なるものがあるという考えを維持するのは難しい。この点では、反本質主義的アプローチに軍配が上がる。

しかし、だからといって、反本質主義が正しいわけでもない。なぜなら、科学が歴史的に多様であるとしても、「科学」や「非科学」の典型例はかなりの程度まで安定しているからである。例えば、「科学」と言われて人々がまず思い浮かべるのはニュートン力学ではないだろうか。もちろん、それ以外にも原子核物理学や分子生物学など様々な選択肢はあるが、いずれにせよ、人々のイメージする科学の種類は現実と比べると遥かに限られて^{はる}いる。これはおそらく、理科教育の影響によるところが大きい。逆に、二〇世紀に限れば、動物磁気（メスメリズム）や骨相学は「非科学」という評価が安定している。

それでは、科学の研究活動が歴史的に多様であるにもかかわらず、「科学」や「非科学」の典型的なイメージが固定されているのはなぜなのか？ 反本質主義的アプローチは、この問題にうまく答えることができない。

こう考えると、科学と非科学の境界線をめぐる理論は、「科学」と呼ばれるものの歴史的な多様性を捉えると同時に、その典型的なイメージが固定されている理由をも説明するものでなければならない。言い換えれば、科学を B と見るのでも、C と見るのでもない視角が必要になる。

(松村一志『エビデンスの社会学』より)

(注1) 形而上学Ⅱ感覚や経験を超えた領域に神や精神といった原理的なものがあるとし、それらを理性的思考によって認識しようとする哲学の一領域。

(注2) マルクス主義Ⅱ社会主義思想体系の一つ。神や精神といった観念的な原理を否定し、生産や消費といった経済活動が社会の根幹を成すとする唯物的な理論を掲げる。

(注3) 精神分析Ⅱ人間の精神に無意識の領域があるという仮説に基づき、精神の構造を解明して神経症などの治療に結びつけようとする理論体系のこと。

(注4) 階級闘争Ⅱマルクス主義の主要概念の一つ。社会的格差を解消するために発生する階級間の闘争のことであり、社会発展の原動力とされる。

問1 傍線部①「この回答に満足しなかった」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答番号は 14。

- ① マルクス主義やフロイトの精神分析を科学から区別するためには、反証できないことを科学の条件とする方が有効だから。
- ② マルクス主義やフロイトの精神分析は経験的には検証されないものの、それらの正当性を裏付ける事例は数多くあるから。
- ③ マルクス主義やフロイトの精神分析の理論を裏付ける事例に対して反証を行うためには、議論を次々に後付けせざるを得なくなるから。
- ④ マルクス主義やフロイトの精神分析に賛同する人々が、それらの理論を裏付ける経験的な事実を挙げることはいくらかでも可能だから。

問2 傍線部②『反証可能性』自体に反証例がある」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 科学者の中には、自分の理論に対する反証例が提出された際、補助的な仮説を利用することによって、反証に対する反証を試みる者がいるということ。
- ② 非科学の中には、反証が可能な範囲が理論の「防御帯」の部分のみにとどまり、理論の「堅い核」を反証しきれないものがあるということ。
- ③ 科学的な理論であれば必ず反証が可能であるわけではなく、「反証可能性」を科学の条件とする見方が裏切られることがあるということ。
- ④ ある科学理論に対する反証が一時的に有効であっても、少し待つうちにその理論が前進的なものになり、反証が覆される場合があるということ。

問3

空欄

A

に入る語句として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[16]。

- ① フロントティア
- ② グラデーション
- ③ シンメトリー
- ④ バッファゾーン

問4

傍線部(3)「それでもやはり『疑似問題』という言葉には見るべきものがあると思われる」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[17]。

- ① 科学か非科学かを区別することは不可能だという見解にも一理あるが、科学と非科学を分けるための基準を複数設ければ、両者の間に線を引くことも完全に無理だとはいえないから。
- ② 科学と非科学を区別するためには、人々が科学と呼ぶものに共通する要素を抽出する必要があるが、科学は時代とともに発展しており、歴史を通じて変わらない科学の要素は存在しないから。
- ③ 科学哲学者たちは科学と非科学を区別するために科学の必要十分条件を提示してきたが、それらの条件が常識として根づいたことはこれまでの歴史においてなかったから。
- ④ 科学か非科学かを区別する際には、人々が科学について抱いている常識に基づいて判断することになるが、そうした常識は時代ごとに変化し、一貫性をもちえないから。

問5 傍線部(4)「境界画定作業 boundary-work」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。 解答番号は18。

- ① 科学者の実践において、科学と認めるべきでない活動をより多くの局面で排除できる基準を選び出し、それをその時代の科学の特徴として提示すること。
- ② 科学者が特定の活動を科学から区別しようとする際に、その時々 の 区 別 に 役 立 つ 科 学 の 性 質 を 選 び 出 し、それを一時的に科学の特徴として提示すること。
- ③ 科学的実践の各局面で生じる様々な要求に合わせて、科学ではない活動を次々に排除していき、最後に残ったものがもつ性質を科学の特徴として提示すること。
- ④ 科学を正当化するために役立つ様々な科学の要素を場当たりに選び出し、それらに共通する性質を科学の特徴として提示すること。

問6 空欄 B・C に入る語句の組合せとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。 解答番号は

19。

- | | | | | |
|---|---|------------|---|------------|
| ① | B | 多様性を含むもの | C | 時代ごとに異なるもの |
| ② | B | 常に検証可能なもの | C | 常に反証可能なもの |
| ③ | B | 超歴史的なもの | C | 普遍的なもの |
| ④ | B | 完全に確定されたもの | C | 完全に不確定なもの |

問7

本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 20。

① イムレ・ラカトシュは、新事実を予測できるプログラムの方がそうでないプログラムよりも科学的だといえるが、後者のプログラムも後から新事実を予測できるようになる可能性があるので、「新事実の予測」を科学の条件とした場合、結局は科学と非科学の区別がつかなくなると指摘した。

② 科学を科学たらしめる不変の条件はないというラリー・ラウダンの主張は、伊勢田哲治が提示しているような解決策まで否定している点では行き過ぎだといわざるを得ないが、人々が何を科学と呼んでいるのかが歴史的に定まらない事実を捉えている点では適切である。

③ トマス・ギアリンは、科学の本質規定を追い求めるのではなく、科学者が研究活動を進める中で科学の条件を決めていくやり方に注目しており、普遍的な科学像の存在を前提とする理論とは一線を画す議論を進めているが、線引き問題に最終解決をもたらしたわけではない。

④ 論理実証主義者は、経験的に検証できることを科学の基準とし、形而上学的な言明は真偽を経験によって検証し得ないため科学から区別できると考えたが、形而上学的言明の中にも事例によって裏付けることが可能なものがあるため、それは十分な基準だとはいえない。

4

次の各問いの傍線部のカタカナに相当する漢字と同じ漢字を使うものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選べ。解答番号は 21、22、23、24。

問1 道路がジユウ滞する

(解答番号は 21)

- ① 事業を拈ジユウする
- ② 責任のジユウ庄に耐える
- ③ 苦ジユウの決断を下す
- ④ 敵対者を懐ジユウする

問2 宗派の開ソをお堂に祀る

(解答番号は 22)

- ① 平ソの努力が実る
- ② 意思のソ通を図る
- ③ ボートで川をソ上する
- ④ 師の言葉をソ述する

問3 企業の沿カクを調べる

(解答番号は 23)

- ① 制度を改カクする
- ② 城カクの跡を調査する
- ③ 他とは別カクの感がある
- ④ 組織の中カクを担う

問4 作品が博物館にシヨ蔵される

(解答番号は 24)

- ① シヨ民の声に耳を傾ける
- ② 独立してシヨ帯をもつ
- ③ シヨ名活動をする
- ④ シヨ般の事情を鑑みる

5

次のそれぞれの空欄に入る語句として最も適切なものを、①～④の中から一つ選べ。解答番号は 25、26、27。

問1

従業員のモチベーションをあげるために

制度を導入する。

(解答番号は 25)

① インセンティブ

② アレゴリー

③ カタルシス

④ アンビバレンス

問2

災害の後は、

の復旧が急務だ。

(解答番号は 26)

① プロット

② インフラ

③ コンプレッサー

④ ポータル

問3

彼の博識ぶった

な話し振りにはいんざりだ。

(解答番号は 27)

① パースペクティブ

② オプティミスティック

③ シンボリック

④ ペダンティック

6

次の各問いの対義語の組合せとして最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選べ。解答番号は28、29、30。

問1

- | | | |
|------|----|----|
| ① 軽侮 | ↑↓ | 尊大 |
| ③ 親疎 | ↑↓ | 忌避 |
| ④ 賛同 | ↑↓ | 忠告 |
| ④ 和解 | ↑↓ | 決裂 |

(解答番号は28)

問2

- | | | |
|------|----|----|
| ① 膨張 | ↑↓ | 縮小 |
| ③ 湧泉 | ↑↓ | 枯渇 |
| ② 根幹 | ↑↓ | 枝葉 |
| ④ 快癒 | ↑↓ | 本復 |

(解答番号は29)

問3

- | | | |
|------|----|----|
| ① 憂愁 | ↑↓ | 激情 |
| ③ 快諾 | ↑↓ | 諾否 |
| ② 沈滞 | ↑↓ | 助長 |
| ④ 促進 | ↑↓ | 抑制 |

(解答番号は30)

[出典]

1

佐藤 仁. 争わない社会 : 開かれた依存関係をつくる. NHK 出版, 2023, p. 45-51.

許諾日: 2025 年 6 月 4 日 License ID : G2845-251116386

2

藤原 辰史. 縁食論 : 孤食と共食のあいだ. ミシマ社, 2020, p.51-57.

許諾日 : 2025 年 6 月 16 日 License ID : G2845-251116387

3

松村 一志. エビデンスの社会学 : 証言の消滅と真理の現在. 青土社, 2021, p. 110-116.

許諾日 : 2025 年 6 月 5 日 License ID : G2845-251116388